

【ジョン・ボウルビイの追憶;タヴィストックの頃】 (2007)

マーガレット・ラスティン(Margaret Rustin)

Consultant Child and Adolescent Psychotherapist
and Head of Child Psychotherapy, Tavistock &
Portman NHS Foundation Trust

〔※原典: 「John Bowlby at the Tavistock」,

Attachment & Development, December 2007; 9(4): 355–359〕

《要約》; ボウルビイの【タヴィストック・クリニック】に於ける最もよく知られた業績としては、母子関係の愛着(アタッチメント)の基礎的研究が夙に有名であります。この論文ではその他にも彼が為したところの際立った功績について論述されております。まず一人の臨床家として、彼は家族の力動性に注目し、そして児童期に勃発する不安感がいかに起こるのか、その源に遡り実際に起きた出来事のインパクトに関心を向けたということ。それからもう一つ、公衆精神衛生 public health の向上を旨とし、精神分析に基礎づけられたチャイルド・サイコセラピストのトレーニング機関を創設するにあたり、彼が担った役割上で発揮された、その組織づくりの類い稀なる手腕についてであります。

《キー・ワード》; チャイルド・サイコセラピー、戦後のNHS(国民健康保険)の発展、ファミリー・セラピー、タヴィストック・チャイルド・サイコセラピーのトレーニング。

ジョン・ボウルビイ(John Bowlby)は、「愛着理論 attachment theory」を基礎固めしたりサーチの業績では夙に著名であります。それに較べますと、彼がさまざまな優れた人材を集め、よく統率し、組織を立ち上げるといった、‘組織づくり’の敏腕家であったことにはさほど注目されていないように思われます。しかしながら事実としては、そのお蔭でどれほど臨床的な創造力が育まれるに至ったか知れないのであります。その影響下で薫陶を受けた者たちにとって、彼は実に重要極まりない方でありました。そもそも【タヴィストック・クリニック】、並びにその「チャイルド・サイコセラピスト養成コース」の国際的な評価は実に彼個人の人徳に負うところ大といえるのであります。【タヴィストック・クリニック】の「the Department of Children and Parents(子ども及び親たちの部門)」の将来に夢馳せての青写真は、彼の構想において中枢となるものであります。彼は、子どもを対象としたメンタル・ヘルス・クリニックにおいては子どもそして両親のいずれにも治療的働きかけが必要であるといったコンセプト、それも多様かつ相異なる方法がさまざまに試みられて然るべきといった柔軟で想像力溢れるアイディアを持っていたばかりではありません。そのためにも学際的な共同研究 multi-disciplinary collaboration が実践されるべきであるといった構想をも抱いていたのであります。そこで戦前のチャイル

ド・ガイダンスでの子ども及び母親の並行治療面接といったモデルはさまざまに拡張されてゆきました。まず最初に、子どもは学校でどんなふうか、その実態に注目するといったことが考慮されましたし、そして父親も子どもの治療過程に積極的に参加することが促されたわけでありです。それから第二に彼は、新規に「チャイルド・サイコセラピスト」といった職種が将来是非とも必要とされると信じた精神分析家並びに精神分析的シンパともいえる精神科医のごくマイナーなグループの一人であったということが挙げられます。そこで問題提起されておりましたのは、特別の治療 treatment を必要とする子どもらの人数からしてそれに対応し得る専門職（プロフェッショナル）の数がごく限られているといったことでもあります。子どもの心がどのように形成づけられてゆくか、児童分析（セラピー）の臨床から得られた知見は実に啓蒙的であり、そうした経験を背景として、いずれ子ども並びに家族のメンタル・ヘルス・サービスを担う公的な精神衛生の展開の一環として、一群のプロフェッショナルな要員がさらなる公的に認可されたトレーニングを受けることは大いに価値あるものと見做されたわけでありです。それまでは、そうしたトレーニングはごく狭い意味での児童分析（セラピー）のトレーニングであり、もしくは個々人の関心に依拠したところの何らかの特別な事情に於いてのみ試みられていたといえるのであります。

NHS (National Health Service/ 国保健康保険) の適用枠内でのトレーニングを立ち上げるに当たり、【タヴィストック・クリニック】も協賛する意向を固めます。広い意味では地域のメンタル・ヘルスに精神分析的なアイデアを導入してゆくといった概念がその底流にあったといえましょう。そこでポウルビイは、エスタ・ビック (Esther Bick) を招聘したのであります。彼女は、子どもの発達研究に造詣の深い児童分析家であり、その人柄はなかなか侮り難い、強面 (こわもて) の印象がありました。ところが直にビックとポウルビイは個人的レベルでしっかりとゆかず、気が合わないといったことが表面化してまいります。子どもたちの情緒的困難をめぐって、その‘内的要因’を殊更強調する彼女のスタンスが、彼の嗜好からして狭量に感じられたわけでありです。それからビックは【タヴィストック】を去る前に、トレーニングの概要をほぼ地固めたこととなります。そこには、自然主義的な乳幼児観察、子どもの発達及び精神分析理論についてのアカデミックな研究、そして児童ならびに青年期の子どもたちの臨床例のスーパービジョンが盛り込まれており、さらにはそれらに伴い、個人分析 (Personal Analysis) を受けることが並行して規定されました。その後ビックの後継者となったのが、ポウルビイとも安定した良好な関係にあったマーサ・ハリスであります。こうしてポウルビイ & ハリスの二人組は、それぞれ違ったスタンスを持ちながらも、ともに協調的であり、うまく連携し合ってゆくわけでありです。彼らの指導下で学ぶ研修生らは、それら相異なる要素のどちらもが己自身のトレーニングには必要であると認識していったこととなります。そしてそれらのどちらへ歩みを進めてゆくかは各自の裁量に委ねられ、まったく自由であったわけでありです。コースの初期の頃の訓練生の幾人かは、メアリー・ポストンそしてダイナ・ローゼンブルースであります。ジャームズ・ロバートソン共々ポウルビイの調査研究に深く携わっていくこととなります。

この新しいトレーニング・コースを【タヴィストック】内で機能させてゆく一方で、ポウルビイは【チャイルド・サイコセラピスト協会 the Association of Child Psychotherapists】の創立に尽力なさいました。それらは3つのトレーニング機構と一緒に寄り合ったものであります。その一つは、同じ頃にアンナ・フロ

イトが【ハムステッド・クリニック the Hampstead Clinic】で創始しておりましたのがそれです。次に【タヴィストック・クリニック】。そして3つ目がMargaret Loewenfeldの率いるところのグループであります。それは【Institute of Child Psychology】内に設置されました。ポウルビイの政治的手腕とその知力が大いに発揮されました。何しろチャイルド・サイコセラピーというのは、実にまだまだ目新しい職種でありましたから、それら組織同士の内部事情が複雑に絡み合っただけでなく、下手すればまだ‘揺籃期’の段階で息の根を止められる可能性があったのです。それを擁護せんとポウルビイは奮闘したのであります。【タヴィストック・クリニック】は成人を対象とした精神分析が主流でありましたし、子どもを対象にするのはどちらかという当時では‘二流’といった印象があったのも事実です。【The Institute of Psychoanalysis】にも、その会員の幾人かにこのトレーニングへの賛同ならびにサポートが要請され、そこで研修生各自に個人分析 personal analysis を、研修症例にはスーパービジョンを施すといったことの検討が余儀なくされ、当然ながら彼らとしては自分たちの領域外にあたるトレーニングについてはアンビバレントな心情を抱いていたわけでありました。非医師が深刻な障害のある児童および青年期の子どもたちの積極的 intensive 治療に当たり、独立的な専門技術および地位を獲得するといったことは当時まだ一般的に容認されるには至っておりませんでした。ポウルビイのこの企画に当たった信念と覚悟のほどは揺るぎないものであり、まだ萌芽にすぎなかったこの職種それ自体が形をなしてゆくためにはそうした彼の泰然自若たる姿勢こそが絶大な梃子(てこ)であったといえるのであります。

イギリスに於ける‘戦後世代 a post-war generation’は、子どもたちそして家族というものに対して多大なる変化を期待してゆかなくてはならないし、そうするだけの基盤となる知識は十分に備わっており、だからさらなる調査研究が人間関係についていっそうの理解を拓いてゆくものと信じたわけでありましたが、ポウルビイはそうした戦後世代の一人でありました。それは根本的な改革をめぐっての希望に溢れた時期でした。【タヴィストック・クリニック】の史実から申しましても、人間性に於ける否定的な動き the negative forces が世界戦争を勃発させ、そして創造性をも攻撃しかつ破壊しかねないものとして警鐘を鳴らしてきており、それが常にその文化的な力の一部であったわけでありました。「英国精神分析」の中のクライン派の伝統は、フロイトの考え方の幾分悲観的な要素を取り込んできたわけでありまして、人間の破壊性についてはその起源、性質、そして形態について大いに論究されてまいりました。ポウルビイの楽観主義 optimism そして急進主義 radicalism は、このマイナーながらも熱烈な論客揃いの集団に於いてはポジティブな極にあつたと言えましょう。彼が反対を表明したところの人々の間にあつても、彼の展望 perspective に垣間見られる重要かつ不可欠な要素はしばしば共有し得たわけでありまして、それでどうにか同盟は維持されてゆき、それで活動が前進されていったこととなります。分析的なスタンスを有する臨床家そして研究者たちは、誰もが或る意味でアウトサイダーであつたといえましょう。精神科医療において主要なパラダイムは「精神分析」ではありませんし、その初期の頃の「愛着理論」も全然まだ及びではありませんでした。そしてアカデミックな世界はこれらすべてに対して、僅かな例外を除けば、敵対していたとすら言えましょう。ポウルビイが【タヴィストック・クリニック】を【London University】に提携させようとした試みは拒絶されたわけでありまして。詰まりのところ、ここで明らかとなるのは、所詮それは欄外に置かれたまま、常に‘体制側 The establishment’にとっては厄介至極

な‘アブ’の如き存在として敬遠されるといったふうだったわけです。「愛着理論」及びその調査研究の成果を国際的な視野でもってみると、今やそれは奇異としかいいようがないのでありますが。

ポウルビイの臨床的な思索はまた、われわれの注目を引くに充分値するものであります。幾つか意義深い貢献と呼ぶにふさわしいものがあります。そのうちでも2つ取り分けて新鮮味を失わない、貴重な論文をここで挙げてみましょう。最初のは、1949年に発表された論文『The study and reduction of group tensions in the family(家族の相互関係をめぐっての研究、及びその緊張緩和について)』であります。ここではまず次のような事柄が取り上げられております；

世界中のいづこの児童相談所のスタッフ(Child guidance workers)であろうとも、彼らがもっともっと認識すべきではないかと私が日頃懸念いたしますことは、クリニックに持ち込まれるところの、一見して子ども本人にあるとされる問題、それが本当のところ全然問題ではないということです。むしろ一般にわれわれが解決しなくてはならない問題とは、家族を構成するところのそれぞれのメンバー間の緊張 tension なのであります(Bowlby, 1949)。

ここで彼の主張がどのように展開されているのかを述べてみましょう。それは実験的なファミリー・セラピーであります。ファミリーを構成するメンバーそれぞれ、子どもも親も一緒にセラピーをそれぞれ個別の治療と兼用させてゆくといったモデルの発達であります。詰まり、ここでわれわれは、‘精神分析的なファミリー・セラピスト’としてのポウルビイを想定していいでしょう。Wilfred Bion 及び Elliott Jaquesの提唱したところの「グループの機能」についての理論を引用し、従来の子どもそして親の並行面接といったモデルを転換し、むしろ親子共同インタビューでそのファミリーグループのダイナミクスを扱ってゆくことができる方向へと舵取りしていったわけであります。その論文の素晴らしい最後のセクションにおいて、彼はまた、実に楽観的な態度で、或一つの社会的関わり(例えば、臨床的な介入によって援助される家族内)にもたらされる‘良性のプロセス’は家族を超えることがあり、つまり子どもたちは学校へ通いますし、大人たちはより広い外の世界で働いており、でありますから彼らのよりよい精神状態は人と人との関わり合いにさらなる影響力を及ぼすであろうといった考えをあれこれ陳述しております。臨床家としてのわれわれが、期待はますます募ってゆくばかりで、悲惨 distress のレベルはいっそう高まってゆくといった実情があり、それで援助する手立てにおいてさまざまな相違が考えられるといった場合、果たして何がどれほどの違いを生み出すことができるものかと思ひ悩む際には、このことは心に留めておくに有益でありましょう。もしもたった一つでも良き治療が期待できたとしたら、ポウルビイが指摘するように、それが複雑にさまざまにポジティブな影響を周囲に及ぼすということがあるわけです。この論文は、ポウルビイの、それぞれ異なる知的資源からのアイディアを網羅し、創造的に結び合わせる能力を例証しているといえましょう。彼のファミリーを対象とする臨床へのアプローチは、【タヴィストック・クリニック】に於ける「ファミリー・セラピー」の発展において一つの力強い重要な流れをつくっていったわけがあります。彼は、ファミリー構成メンバーそれぞれの心のうちの無意識的力動的要因にアテンション(注意)を向けながら、それとファミリー・システムの探索、そしていっそうシステムック systemic なアプローチに

結合させていったこととなります。システムな※思索家そして精神分析的思索家の間には埋めがたい溝があり、それらはポウルビイの見解において首尾一貫しているとは言い難いかと思われます。

[※訳註;ものごとをシステムとして俯瞰的全体的に見るということ。]

彼の2つ目の重要な貢献と申しますのは、その論文『Knowing what you are not supposed to know and feeling what you are not supposed to feel(知ってはいけないとされることを知ること、感じてはいけないとされることを感じること)』(Bowlby, 1988)であります。この最後に語られておりますところの彼の見解 version は認識論的焦点づけがあり、そうしたものへの感触も十分うかがわれます。しかしながら、より広い意味での重要性は、子どもの心に刻み込まれた真の外傷的体験 real traumatic events のインパクトをめぐっての彼の見解 version であります。子どもの不安感およびその問題行動を理解する上での重要な決定因子として、実際その子が具体的にどのような目に遭ったのかを問いたず姿勢を彼は決して崩すことはありませんでした。とことん「事実」に深く耳を傾けたのであります。彼は、精神分析的なセラピストが得てして子どもの身に実際に起きた事実を無視し、かつ空想を過度に評価しすぎると批判したのでありますけれども、「乳幼児のメンタル・ヘルス」という分野において発展されていったもので、その一つとしてよく知られた例を挙げますと、セルマ・フレーバークなどの業績ですが、この‘実際に起きたこと’とは何かという点でそのカテゴリーに果たしてどのようなものが含まれるかを、われわれに改めて考えさせる契機をもたらしたといえましょう。母親の心の内の無意識的同一視、それが彼女の描写するところの「赤ちゃん部屋のおぼけ」の性格を帯びるとき、そのすべてがあまりにも現実的 too real であります。同様に、ビオンの「コンテイナー container とコンテインド contained 理論」は‘コンテイナー(母親の抱える力)’の性質(クオリティー)というものの重要性に大いに光を投げかけ、そして乳幼児期の不安の‘コンテインメント’の不在が子どもの思考能力の発達に無惨な結果を招くといったことにわれわれの注意を促します。ポウルビイは分析的な思考ならびにその実践に幾分批判的なスタンスを敢えて維持したといえますけれども、彼は、確かに別様の描写スタイルを採用したものの、多くの面において分析的なアイディアに深く同調していたものと私は敢えて申し上げたいのです。現実感 sense of reality を著しく損なうところの、深刻な育児放棄もしくは過剰な投影をとおして害され傷ついた子どもらとの治療的な接触をはかろうとしますとき、セラピストは、その本質的なレベルにおいて子どもがどれほど気の狂れんばかりの思いへと駆り立てられているか、またそうした状況において自己を防御するためにどれほど死に物狂いで心理的な方策をとるものかを思い知らされることとなります。それこそ決して回避することの許されない課題なのであります。

最近の或る臨床例の一つが、ポウルビイの児童サイコセラピストに及ぼしたインパクトを例示するものとして脳裏に浮かびます。その臨床とは、主に身体的および認知的欠陥をもった子どものセラピーでありました。それは彼の特殊学校に於いて行われております。言語的コミュニケーションの極めて深刻な問題を抱えており、それに彼の衝動性および攻撃的な行動、そして彼の身体的な無秩序・脆弱さにも関わらず、学校の教員スタッフの間では、この子の内側には豊かなものが潜んでおり、個別のセラピーによってそれらが幾らかでも顕在化されるのではないかと感じておりました。それがその通りになった

わけであります。彼を担当した、想像力溢れるセラピストは、彼の希求する律動的リズムカルな性質を感知する方法をどうにか探り出したわけであります。そこで彼は、彼の人生を形づくるものを、そしてまたそこに意味をも見出すに至ったのであります。彼らの会話のやりとりがますます増えてまいりました。この小さな男の子の意識はその尋常ならざる、無惨ともいえる極限状態に焦点づけられていったのであります。これに伴い、セラピーにおいて、その彼の‘内なる母性対象’が彼の損傷をきたした状態の現実に対してまったく盲目であるというエビデンスが表出されましたわけで、それで母親にも別のスタッフによって並行面接が行われていったというわけです。そこから彼女の息子との関わりは、否認、理想化、そして‘子ども扱いinfantilization’といったことに特徴づけられていると判明されていきました。こんなふうにファミリーという環境では決して知ろうとすることが許されていないことを、セラピストを活用することで、どうにか知ることが援助されていった、そんな子どもの事例がこれであります。セラピーにおいて提供されたところの彼自身の経験をそのままに味わうことの自由は、その言語的能力を伸ばすことに大きく寄与したものと考えていいでしょう。

私自身ポウルビイの学際的な症例検討会に参加した経験からして、もう一つ彼の臨床的アプローチがはっきりと覗かれるエピソードをご紹介します。私がそこで提出しました症例は、深刻な問題を抱えた6歳児でありました。早期のかなり悲惨な生育歴があります。危険をとまなう早産であったこと。そして母親の付き添い無しに病棟に留め置かれたままであったこと。そして12ヶ月目に離乳を強いられたこと。母親の回想では、この期間彼女は頭を激しく打ちつけ、頭蓋骨骨折という事態を引き起こしております。家族歴はまたかなり困難を極めたものでありました。父親は戦中ポーランドで育てております。彼女は私と一緒にセッションのなかで、そのメンタルな意味での極限状態を疑いようもなく実に原始的な表現で表出しました。彼女は破壊された内なる世界を恐れ慄いていたのです。その損傷は償われることがなく、そして彼女を守ってくれる良き対象は不在であり、しかも復讐心のある迫害者に取って代わられていたのであります。毎回のセッションのたびに、私はメラニー・クラインの早期の子どもの身に起こることについての理論の幾つかがどれほど精確さを実証しているか、真底驚きを隠せませんでした。同時に、世代間の外傷体験が子どもの発達にどのようなインパクトをもたらすかといったことに直面せざるを得ないのでありました。そして、どれほど両親によるパワフルな無意識的投影が子どものころを形成するかといったことも…。一つ私がひどく圧倒された出来事があります。私の患者は、アウシュビッツのポイラー（焼却炉）を遊びの中で演じていたわけなのですが、<そこに悪い赤ちゃんは放り投げられるのよ>ということだったのであります。

この臨床事例に耳を傾けていたDr. ポウルビイは、その最後に、これは積極的な intensive サイコセラピーが絶対に必要とされる子どもの類いだとおっしゃいました。彼は、疑いもなくこの子には脳損傷が懸念されるとも示唆なさいました。そして彼はその点において正しいと思われまふ。しかしそれだからこそいっそうのこと彼女にはこうした治療が提供されるべき理由ともなり、彼女が持って生まれたものの潜在力を可能な限り延ばし、そして人生を彼女にとっても、そしてまた家族にとってもより耐えられるものにしてやるために、チャンスは可能な限り彼女に与えられるべきということなのであります。当時私と

しましては、この事例をめぐってタヴィストック部門のシニアのスタッフ間に於ける、クライン派とポウルビイ派間の諍いを巻き起こす危惧の念を否応もなしに意識せざるを得なかったわけです。従って私は二重の意味でポウルビイの心尽くしに感動を覚えたわけであります。一つは患者に対して、そしてまだ当時若く未熟なチャイルド・サイコセラピイの訓練生であった私に対してもご配慮いただいたということなのです。私が考えますに、彼はチャイルド・サイコセラピストたちが生きることのチャンスを著しく深刻に損なわれているといった一群の子ども患者たちを相手に懸命に心血を注いでいる現況をととても喜んでおいでだったように思われます。剥奪され、無視され、放棄され、そして惨くも邪険にあしらわれている子どもたち、難民たち、そして学習困難を抱えた子どもたち(自閉症の子どもらも含めて)、そうした彼らを相手に援助の手を差し伸べることこそが、ポウルビイがその創設に大いに肩入れしたチャイルド・サイコセラピイという職業の日常的な業務であったわけであります。ポウルビイは、それぞれ異なる治療的形態は時として一点に凝集し、そしていつしかわれわれの生きてる現実に即したより多元的な臨床コンテキストを採用するに至るのではなからうかとどこかで語っておられます。しかしながら私は、それがいざ実践される際にどのような困難があるのかについて彼は決して過小評価することはなかったでしょうし、それで彼流の紳士的かつ控え目な態度であっても、今日的なその場しのぎの解決法への過度の偏りについてはおそらく懐疑を表明しない筈はなかったろうと思われるのです。(訳出;2016/03/01)

※参考文献:

- Bowlby,J.(1949). The study and reduction of group tensions in the family.
Human Relations,2,123-128.
- Bowlby,J.(1988). Knowing what you are not supposed to know
and feeling what you are not supposed to feel.
In A Secure Base: Clinical applications of attachment theory.
London: Routledge.
- Dicks.H.V.(1970). Fifty years of the Tavistock Clinic.London:Routledge and Kegan Paul.
- Fraiberg,S.(1989). The ghost in the nursery. In S.Fraiberg (Ed.),Clinical studies in infant
mental health. London: Tavistock. [※訳註;『母子臨床の精神力動』
ジョン・ラファエル・レフ編・木部則雄監訳. 岩波学術出版社. 2011.
P.103-139. 『第8章 赤ちゃん部屋のおばけ』を参照のこと。]
- Harris Williams,M.(Ed.) (1987). The philosophy of the Tavistock child psychotherapy training.
The Collected Papers of Martha Harris and Esther Bick.
Strath Tay, Perthshire:Clunie Press.
- Rustin,M.(1999). The training of child psychotherapists at the Tavistock Clinic: Philosophy
and practice. Psychoanalytic Enquiry,19, 2.

< 訳者あとがき > — Dr.ジョン・ボウルビイ、そして‘ノブレス・オブリージュ’ —

山上 千鶴子

メッケタ！と心が躍った。ブラボー！と快哉を叫んだ。どんなに嬉しかったか。嬉しくて頭がポオーツとして、目がウルウルと熱くなるほどだった。ここに、或時期、ジョン・ボウルビイとマーガレット・ラスティンの邂逅があったことが綴られている。どちらも【タヴィストック】の傑出した‘フェアな魂’であり、私にとっては忘れ難い人たちだ。性別も違い、階級も異とし、学歴も職歴の違いもありといった隔たりを超えて、それら‘2つの魂’が寄り添ったのだ。チャイルド・サイコセラピストという職種を立ち上げるためにどれほどの闘いがあったか、そしてそれでボウルビイがどれほど奮闘したのか、私は知らなかった。でもすぐ腑に落ちる。彼が【タヴィストック】のわれらが‘父鳥’だと思えば、妙に嬉しいものがある。マーサ・ハリスを‘母鳥’に見立てて、かくいう私は‘雛(ひな)’の一人として…。マーガレット・ラスティンもまた、かつては彼ら‘親鳥’に抱えられた‘雛(ひな)’の一人であったことがここに垣間見られて、何やら微笑ましい。知らなかったけど…。さもありなん！ボウルビイの功績をめぐって、縷々マーガレット・ラスティンが論述している文章、その行間から彼への深い感謝の念と敬愛の情がとても素直に、それもあまり普通イギリス人には期待できないような、しみじみとした情味が伝わってくる。「誰かの子ども」であったことの嬉しさ、そしてだからこそ今の自分がここに居る！実にこの恩義の念があればこそ、彼らの透徹した心意気を引き継ぎ、かくも永い歲月その重責に耐え、彼女は【タヴィ】を背負い続けてきたのだろう。

さて、ここで強調されている‘組織づくり’の敏腕家としてのジョン・ボウルビイという点では、その貴族出身という出自が味方したのは紛れもない事実であったろう。だが、彼は終始ごく自然体であり、威圧感など恬として無いお方であった。事実として、私は何も知らずに、【タヴィ】の廊下で遠くに彼の姿がちらっと見えただけで何やら嬉しかったものだ。まるっきり‘父親転移’なのか？！って思ってたけど…。もはや記憶は朧でしかないのだが、【概説】でも既に語っているように、姉宛のたよりに私はジョン・ボウルビイの印象を‘フェアな魂’と書いている。ああ、やはりそうだったのだと、今こそ自分の直観の正しさが実証されたみたいで、心嬉しく当時を回想している。振り返りピオンやらメルツァーなどと較べてみても、大した交流もなかったボウルビイに「美しき魂の成熟」を見たのであるから妙といえば妙だ。英語でなら‘グレースフル/graceful(優美な)’といった言葉になろうが…。西歐的叡智の陥穽ともいべきヒュプリス(慢心)、すなわち知を誇ることなぞまるで無縁なお方であった。銜いのない静謐な趣き、それも己を相対化できるシビアなまなざし、つまり徹底して自分を甘やかさない姿勢ということに尽きようが。その上に実務家肌でもあるというから、尚更に嬉しいではないか。私は、彼の地の貴族という階層に詳しいわけでもないし、特に関心はない。憧れを抱いているわけでも毛頭ない。ジョン・ボウルビイが貴族出身だからといって興奮する理由は更々ない。彼の地での、特に富裕層における、過酷な‘子ども事情’を承知しているからか、むしろ率直なところ、どちらかという、あらまあ、お気の毒って感じなのだ。だが、ここで「エリートである」ということがどういうことか、我国の実情に比して考えてみるのも意味がなくもなからうかと思われた。英国の貴族(nobility)階層の者たちには、高貴とされ特権を有するが故の重圧ともいえる責務があり、献身が求められる。それは一般に「ノブレス・オブリージュ」(仏:noblesse

oblige) ※という言葉で知られているようだ。でもそれが口にして語られることなど滅多にない。当人のからだに滲み付いた美徳である。だからこそ得難いわけで・・・。その存在が醸し出す何かであり、だから周囲からも暗黙の了解を得られることにもなろうわけで・・・。〔※訳註；特権は、それを持たない人々への義務によって釣り合いが保たれるべきといった倫理規範。貴族に自発的な無私の行動を促す明文化されない社会の心理であり、それは基本的には、心理的な自負・自尊である。英；noble obligation.〕

さて、ここで翻って我国に目を転じるとどうだろうか。私は今、我国のエリート集団、わけでも精神科医療のなかの「医師集団」に「ジョン・ボウルビイ」の面影を探している！何よりもあの英邁な魂が慕わしい。エリートとは、真の意味で‘民 people’を率いてゆく気概があればこそであり、取りも直さず民の幸せを夢見る人なのだ。特に精神科医療に携わる医師の方々にぜひそれを期待したい。因みに、自分が患者さんのためになっていると実感できること、そのために骨身を惜しまずに尽しているという手応えが求められよう。その一環として、患者さんらに事情が許す限りサイコセラピイの機会をぜひ与えて欲しい。そしてサイコセラピストの新しい趨勢を傍らで見守り、支えて欲しいとも私は願っている。

私が帰国して以降、1980年代初頭には精神科病院に於いてそろそろ患者さんのニーズに応え精神的セラピイが導入されようとする動きがあった。だが個人開業にあたって私は、我国に精神分析の「支持層」というものが果たして有るのだろうかかと煩悶した。それはまるで雲を掴むような心もとなさであった。精神科医からの支援を取り付けるということが肝要なのは自明で、分析患者たちをご紹介いただく‘紹介ルート’として、それは不可欠だった。その点、どうやら私は至極ラッキーだったといえる。ここでお名前は伏せるが、幾人か恩義ある医師たちのお顔が浮かぶ。それも結局のところ患者さんのためになったとしたら、幾らかなりとも彼らの恩義に報いたことになろうかと自らを慰めている。サイコセラピイというのは、「生きられないわたし」が「生きられるわたし」になってゆくことの契機を孕(はら)む場である。それを擁護できてこそそのサイコセラピスト集団なのだ。私はその一人であることを誇りにしている。だが孤軍奮闘は所詮ダメである。この論文に触れられているマーガレット・ラスティンの子どもの患者に示されたボウルビイの心温まるご配慮が格別に嬉しい。おそらくマーガレット・ラスティンがそうであったように、私もやはり目頭の熱くなる思いがする。昨今、我国に於いて臨床心理士が医療の分野へと進出してゆく動きはようやく活発化してゆくようだ。心理テストについては医師からの要請は昔からあるわけだが、今ひとつサイコセラピイという領域において臨床心理士と医師の連携はまだまだ心もとない現況にあると聞く。‘個’が危うい、‘家族’が危うい現実がある。此国の未来が疲弊化してゆこうとしている。願わくは一人でも多くの「セラピイの子ども・分析の子ども」が増えてゆくことを、そしてそれぞれがセラピイの場で「生きられたわたし」を自ら掴み取って欲しいと願う。そのために支援体制における専門職間のリエゾンが今こそ求められる。異業種間の壁を取り払い、‘communality of spirits(協同精神)’を培おう。因みに医療現場では、産科・小児科・児童精神科など相互の連携が図られる機運は高まっており、そこに心理職も大いに歓迎されていると伺う。であるからして、このマーガレット・ラスティンの論文を唯の「タヴィストックの‘昔語り’」として読み過ごしてはならない。今ここに、そして我らの未来に、「ジョン・ボウルビイ」という存在が改めて思い起こされる所以である。(2016/03/01 記)